

# ヴァージニア・プログラムにおける 学校図書館

今井 福司

2007/10/14

## 発表の構成

1. 問題背景および意義について
2. ヴァージニア・プログラムの概要
3. ヴァージニア・プログラムの学校図書館
4. 日本におけるヴァージニア・プログラムの紹介と影響
5. 結論・課題

## 発表の構成

1. 問題背景および意義について
2. ヴァージニア・プログラムの概要
3. ヴァージニア・プログラムの学校図書館
4. 日本におけるヴァージニア・プログラムの紹介と影響
5. 結論・課題

## 問題背景および意義について

1. 本研究の問題背景
2. ヴァージニア・プログラムの学校図書館を取り上げる意義
3. 本研究が解決すべき問題
4. 調査方法・対象とする文献について

## 本研究の問題背景

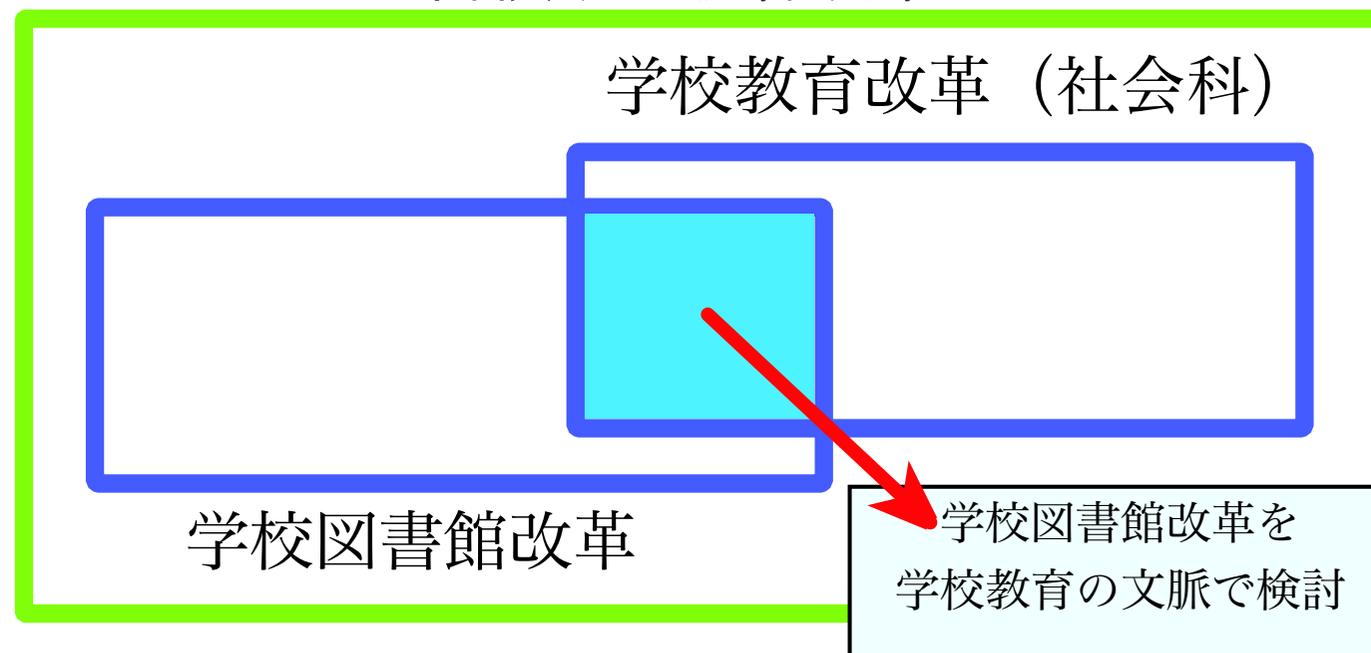
- 発表者は以前，占領期初期の学校教育運動であるコア・カリキュラム運動において，様々な資料を活用することが提唱され，教材センターとしての学校図書館の繋がりがあったと指摘した。（2006年度日本図書館情報学会春季研究集会発表）
- しかし，運動のモデルとされたアメリカのヴァージニア州の教育改革であるヴァージニア・プログラムで，学校図書館がどう扱われていたかについては十分考察できず，今後の課題としていた。

本研究はその課題に取り組んだ研究である。

## ヴァージニア・プログラムの学校図書館を取り上げる意義

ヴァージニア・プログラムの学校図書館がどう紹介されたか見ていくことで、占領期の学校図書館改革について、学校教育の文脈から検討することができる。

### 占領期の教育改革



## 本研究が解決すべき問題

ヴァージニア・プログラムそのものについて：

1. ヴァージニア・プログラムは誰がどんな目的で始めたのか？
2. プログラム自体の影響はどの程度あったのか？

ヴァージニア・プログラムの学校図書館について：

3. 学校図書館はどれだけ必要とされていたのか？
4. 州の学校図書館にはどんな影響を与えたのか？
5. 日本へどのように紹介され、どんな影響があったのか？

## 調査方法・対象とする文献について

本研究では，日本に最も参照された 1943 年刊行のヴァージニア・プログラムの資料（以下，1943 年版と記述する），ならびにその日本訳を中心に文献検討を行う。

- Dabney S. Lancaster, George J. Oliver, and Helen Ruth Henderson. *Course of study for Virginia elementary schools*, Vol. 25. Division of Purchase and Printing, 1943, 553p.
  - 以下ページのみ資料については，この 1943 年版を指す。
- 倉澤剛. 近代カリキュラム. 誠文堂新光社, 1948, 372p.

## 発表の構成

1. 問題背景および意義について
2. **ヴァージニア・プログラムの概要**
3. ヴァージニア・プログラムの学校図書館
4. 日本におけるヴァージニア・プログラムの紹介と影響
5. 結論・課題

## ヴァージニア・プログラムの概要

1. ヴァージニア・プログラムとは
2. 教育目的並びにカリキュラム
3. ヴァージニア・プログラムの全米への影響

## ヴァージニア・プログラムとは

- ヴァージニア・プログラムとは，アメリカのヴァージニア州教育委員会によって，1934年から刊行され，実施に移されたコース・オブ・スタディと指導事例集の総称である。
- 1929年の世界恐慌が発端となり，児童の社会生活への適応を目的としていた。
- 州の教育委員会が主体となり，視学，校長，教師たちの協力を得ながら作られた。
- ヴァージニア・プログラムは，日本の社会科を巡る学校教育改革でモデルとして使用され，大きな影響を与えた。
  1. 学習指導要領（試案）社会科編 1
  2. コア・カリキュラム運動

## 教育目的並びにカリキュラム（１）

学校教育の目的：

- 学校教育の目的は，現実の生活で民主的に行動できる実践力を養うことであるとし，全ての学習は経験から始まるとし，実際的な生活の問題をあらゆる学習の出発点に据えている。

カリキュラム：

- 教科学習と総合学習が併置され，総合学習では社会生活の主要な機能をまとめた「範囲：スコープ」と，扱う段階を示した「系列：シーケンス」を組み合わせ単元が設定される。

## 教育目的並びにカリキュラム（２）

### 総合学習：

- 1943年版では，2学年ごとに「興味を中心」として児童の発達段階に関連した「系列」が示されている。
- 例えば，第5，6学年は「私たちの生活に発明や発見，機械生産が与えた影響」を取り組む段階であり，例えば第5学年では「私たちはどのようにメッセージや信号をやりとりするか」が問題として設定されている。
  - － 単元活動案として，電話交換所を訪れてメッセージがどうやりとりされているかを見学する，教室で使われている視覚教材について読んだり議論したりする活動が挙げられている。

## 教育目的並びにカリキュラム（３）

### 教科学習：

- 総合学習を支える活動として位置づけられている。
- 1943年版では，美術と音楽，家庭科，国語と社会科，数学，保健体育，理科の6教科が組織された。
- 扱う内容については，各教科ごとに形成すべき「能力」の細目を決定し，配当されている。
- 各教科の「能力」は扱う段階と共に，どの程度重視すべきかが表として示されている。（以下「能力表」と記述する）
  - － 能力表は，一般的な能力（例えば「読む能力」など）について，具体的な能力が列挙される形式を取っている。

## 教育目的並びにカリキュラム（４）

能力表の例：

ABILITIES	TEACHING EMPHASIS						
	Grades						
	1	2	3	4	5	6	7
ABILITY TO USE THE COMMON OBJECTIVE MATERIALS OF THE SOCIAL HERITAGE							
To keep materials of the classroom in order, paper off floor, etc.....							
To use instruments of communication:							
telephone.....							

「社会科と国語」の能力表から (p. 280)

## ヴァージニア・プログラムの全米への影響

- ヴァージニア・プログラムは理論的に整合したパターンを作り上げ、アメリカ全土に影響を与えた。
- 佐藤学の研究<sup>a</sup>によれば、アーカンソー州、ジョージア州、カンザス州のプログラム改訂においても、ヴァージニア・プログラムと同様の傾向や形式がみられる。
  - － カリキュラムの構造や、社会機能を教育内容として位置づける点がヴァージニア・プログラムを元に行っていると言える。

---

<sup>a</sup>佐藤学. 米国カリキュラム改造史研究. 東京大学出版会, 1990, p. 292–301.

## 発表の構成

1. 問題背景および意義について
2. ヴァージニア・プログラムの概要
3. ヴァージニア・プログラムの学校図書館
4. 日本におけるヴァージニア・プログラムの紹介と影響
5. 結論・課題

## ヴァージニア・プログラムの学校図書館

1. 1943 年版における学校図書館の記述
2. 1943 年版の記述と学校図書館文献
3. ヴァージニア・プログラムが学校図書館に与えた影響

## 1943年版における学校図書館の記述（1）

Section 3 「社会科と国語」の能力表：

- 「読む能力」という一般的な能力に対して，46項目の具体的な能力が挙げられている。その中で，図書館あるいは，図書館利用教育に関する能力が13項目挙げられている。
  - － 図書館から適当な書物を選ぶ
  - － カードの目録を用いる
  - － 参考書を用いる
  - － formal bibliography を用いる など

能力表の中で図書館を必要とする能力が示されていた。

## 1943年版における学校図書館の記述（2）

Section 4 “Working in the total school program”：

13．図書館（=library）：図書館は学校全体のためのサービスセンターである。（中略）図書館組織の最も好ましい形式は、中央図書館と教室文庫（=central and room libraries）を備え、教室文庫の本は中央図書館から供給される。この形式は本や資料の入手可能性を高める。この配列は本や資料の入手可能性を高める。もしこの形式がとれないのであれば、次善策は、大規模な図書室を有することである。（pp. 464–465.）

「図書館」は学校図書館のことを指していることがわかる。

## 1943年版における学校図書館の記述（3）

### Section 4 “Using and caring for materials: Books”

- 問題解決の資料を共有させる前に「役立つ情報が含まれる本は各教室の文庫，中央図書館，自宅や他の場所から集めなくてはならない。」ということを教員は指導する必要がある。  
(p. 486.)
- 他にも、「本の扱い方が出来るようになったら，各教室の文庫や分館の運営や組織に子どもたちを参加させるようにすべきである」，図書館員（=librarian）がおけない多くの学校では，親たちが代わりに働くことが大きな助けとなるといった運営に関する記述も行われている。(pp. 487-488.)

## 1943年版の記述と学校図書館文献

- Section 4 の記述は，1937年の州教育委員会による“Library Manual for Virginia Public Schools”を参考に行っている。
  - － しかし，マニュアルが何を参考に行っているかは不明。
  - － ただ，1934年版をみるとALAの“A Handbook for Teacher-Librarian”などを踏まえた記述が行われていた。
  - － また，1943年版の図書館の設置形式については，Mary Peacock Douglasの“North Carolina School Library Handbook”の1952年第4版と記述が似通っている。

何らかの学校図書館文献が参考にされたと思われる。

## ヴァージニア・プログラムが学校図書館に与えた影響

ヴァージニア・プログラムの学校図書館への影響：

- C. W. Dickinson Jr. の報告によれば，1930年代に入って小学校では図書館で使うような本の購入が格段に伸びたという。
  - － その要因として，これまで小学校の図書館の本が不足していたことに加え，ヴァージニア・プログラムによるカリキュラムの改訂が要因として挙げられている。

ヴァージニア・プログラムは学校図書館で  
用いるような本の購入を促した。

## 発表の構成

1. 問題背景および意義について
2. ヴァージニア・プログラムの概要
3. ヴァージニア・プログラムの学校図書館
4. 日本におけるヴァージニア・プログラムの紹介と影響
5. 結論・課題

## 日本における 1943 年版の紹介と影響

1. 1943 年版の翻訳と学校図書館の記述
2. 明石附小プランと 1943 年版の関連

## 1943年版の翻訳と学校図書館の記述

- 倉澤剛の『近代カリキュラム』は、ヴァージニア・プログラムについて、1943年版の日本語訳（以下、1943年版翻訳と記述する）が掲載されている。
- 翻訳では、能力表はそのまま翻訳されており、図書館に関する能力も掲載されている。
- しかし、それ以外の学校図書館の記述は省略されている。
- 第4部の“Working in the total school program”の翻訳では、「図書館」という項目があることだけが紹介され、実際の説明は省略されている。そのため、図書館が公共図書館を指しているのか、学校図書館を指しているのかも不明である。
- “Using and caring for materials: Books”は項目自体がない。

## 明石附小プランと1943年版の関連

1943年版翻訳を参考にした実践，兵庫県の明石附小プランの資料『小学校のコア・カリキュラム』でも，単元の内容は異なるが，問題の立て方やカリキュラムの構成の仕方は1943年版翻訳と表現は同じである。

- 能力表も社会科と国語の能力表における「図書館から適当な書物を選ぶ」といった項目が立てられている。
- しかし，1943年版の第4部“Working in the total school program”のように，図書館そのものについて説明されている箇所はない。

ヴァージニア・プログラムの学校図書館は  
日本にそれほど紹介されていなかった。

## 発表の構成

1. 問題背景および意義について
2. ヴァージニア・プログラムの概要
3. ヴァージニア・プログラムの学校図書館
4. 日本におけるヴァージニア・プログラムの紹介と影響
5. **結論・課題**

## 結論・課題

1. 本研究が解決すべき問題に対して
2. ヴァージニア・プログラムに学校図書館は必要とされたのか？
3. ヴァージニア・プログラムの学校図書館は日本にどんな影響を与えたのか？
4. 今後の課題

## 本研究が解決すべき問題に対して（１）

ヴァージニア・プログラムそのものについて：

1. ヴァージニア・プログラムは誰がどんな目的で始めたのか？
2. プログラム自体の影響はどの程度あったのか？

ヴァージニア・プログラムの学校図書館について：

3. 学校図書館はどれだけ必要とされていたのか？
4. 州の学校図書館にはどんな影響を与えたのか？
5. 日本へどのように紹介され、どんな影響があったのか？

## 本研究が解決すべき問題に対して（２）

1. ヴァージニア・プログラムは誰がどんな目的で始めたのか？
  - 世界大恐慌の下，教育内容の見直しが進む中で，社会機能を児童・生徒に身につけさせるために，州の教育委員会が主体となり，視学・校長・教員が一体となって行われた。
2. プログラム自体の影響はどの程度あったのか？
  - 全米各地で取り組まれた教育改革で，ヴァージニア・プログラムの形式や内容が模倣された。
3. 学校図書館はどれだけ必要とされていたのか？
  - 学校教育に不可欠な存在として，必要性が強く主張されていた。

## 本研究が解決すべき問題に対して（3）

4. 学校図書館には，どんな影響を与えたのか？
  - 図書の購入が増大した。
5. 日本へどのように紹介され，どんな影響があったのか？
  - 日本に紹介されたのは，全体の一部であり，学校図書館に関してはほとんど紹介されていなかった。そのため，1943年版の翻訳を参考に行われた実践の資料でも，「学校図書館」という言葉は登場しない。

## ヴァージニア・プログラムに 学校図書館は必要とされたのか？

- 教科学習の能力表で図書館を使う能力が示されていた。
- 総合学習，教科学習の両方にわたる教授の手続きにおいて，図書館についての説明がされていた。

また C. W. Dickinson は，1934 年の時点でヴァージニア・プログラムの教育には，図書館利用指導が欠かせないと主張している<sup>a</sup>。

ヴァージニア・プログラムに学校図書館は必要とされていた。

---

<sup>a</sup>C. W. Dickinson Jr. How may library instruction be integrated with curricular subjects and whose should be the responsibility for initiating such a program: The teaching staff or library staff? *Peabody Journal of Education*, Vol. 11, No. 6, pp. 272–275, 1934.

## ヴァージニア・プログラムの学校図書館は 日本にどんな影響を与えたのか？

- 日本では学校図書館の記述がほとんど翻訳されていなかった。
  - － 影響そのものはほとんど無かったのではないか。

根本彰は、占領期のカリキュラム実践において学校図書館に関する議論がなされていないと指摘している。その原因として、1943年版翻訳で学校図書館が紹介されていないことが言えるのではないか。

ただし、日本の学校教育における学校図書館の理解を探るためには学校図書館改革との関連をきちんと検討する必要がある。

## 今後の課題

本研究では、以下の点について十分検討できなかった。  
今後の課題としたい。

- 1943年版が参照していた学校図書館文献の詳細について
- 日本の学校図書館改革の関連性について
  - － 特に、中村百合子の博士論文「占領下日本における学校図書館改革：初期から中期の日米の協働の分析」はアメリカからどういった学校図書館の概念が持ち込まれたかを示しているため、これを参考にしながら検討を続けていきたい。

発表は以上です。  
ご静聴ありがとうございました。